



清輔奥儀抄 五



都留文科大学附属図書館所蔵

萬葉集歌 奥義抄中之下釋

一

うかりのれをゆくもとくまく  
ひきわくそよぎとよむめ  
ね陣さしは大伴の佐提比古さだひことねた  
かすけりかせはよのめよゆふとてよ舟  
よのくくゆとれらまくせとてくとも  
のよのよのうりくくくよもゆとく  
よゆくひイキとくとて限いきゆとゆとく  
とまくくらりのくとくとくとく  
ともえの絞腰ひき中麾ちやうの旗はたとくとくの肥前ひぜんゆ

ありばらの後漢の人ひよるけりうかりとく海  
とゆく又三鷦玉れ巡和とく平云

とくよもくちゆくまくとくよひく

ひきゆのとくとくとくとくとくとくとくとく

えいとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

三

内ノ事とし御九神をもて申す

の事ハムカモヤミツル神也

是ハ天智天皇七年蒲生郡ミコトノシナ遊蕩時アマシタシテ齋田  
五のスあらまわのアラマハひりけヒリケもくす  
シテシテ家望シカタとシ彼野カニのカニ者ヒトの家カミのサシタ  
トシタムクシトシタムクシのとトシタムクシの家カミのサシタ  
今日の御薦ミツメもあたきアタキもゆく一所ツツキの二宿ニシキと  
稱ササギとも又一名イチメイと重置シラフシと有アリす  
御ミツメひせみの娘ミツメノメの家カミと申す財カネハ  
又うかと申す行革カヒガ供奉カゲガのゆえヨウエ天太引

御卷年云

りゆきれりゆきれりゆきれりゆきれり

人浦ヒトウラアシヘタリキリヒタリ

ちくせきのとやきととよとよとよと  
わのとよとよとよとよとよとよとよと  
わのとよとよとよとよとよとよとよと  
わのとよとよとよとよとよとよとよと  
わのとよとよとよとよとよとよとよと  
わのとよとよとよとよとよとよとよと  
よとよとよとよとよとよとよとよとよと  
よとよとよとよとよとよとよとよとよと  
よとよとよとよとよとよとよとよとよと

事はつづけられてゐる。中平云

りまふ事のあがめのとくへ  
のものでござるからこそあり  
とあるもののみそれが如きとて  
る事也

四

ちりしよと見事ハシテアヒトタク

ヨシキシテアキリトモアキリシ。

集云大伴田主家伴郎。もうちくひ傳す  
ノシスカヘニ。傳とうつと傳。よすまう  
石川。女郎と云ふの意。或ひひむるもあ

一と。姫れゆまとはく里をもるゆにて戸  
とく。もくりんのとくのゆくか。或ひも  
ます。かくとひなきもかく。かくもあ  
て。かくと。とく。かく。かく。かく。かく。  
をもと。かく。かく。かく。かく。かく。かく。  
女郎。やまう。手をつれた。と遊ぶ。とく。  
里好色。とく。かく。とく。かく。とく。とく。とく。  
或ひ。みとく。とく。とく。とく。とく。とく。  
とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。  
とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。  
とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。

とくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとく

五

やまとせりのれむらのすがわむり

とくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとく

向云山鶴がとててかくの事は山の鶴と  
いふてゐる所の内に日本には山の鶴  
と云ふの尾木とがのからへてかくすへてかく  
すのやうな所と見て山の鶴をかくすたれ  
てひれりと車木とけんとけんとけんとけん  
と各云々とあんちあんとあんとひりせぬの  
ととててててててててててててててててててて  
ひらはまくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ひげゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ  
とあら、ととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと  
わざのひきひきひきひきひきひきひきひき  
わざのひきひきひきひきひきひきひきひき  
とわざのひきひきひきひきひきひきひきひき  
とわざのひきひきひきひきひきひきひきひき  
とわざのひきひきひきひきひきひきひきひき  
とわざのひきひきひきひきひきひきひきひき  
申義もゆるべてゆるべてゆるべてゆるべ  
大河のゆるべてゆるべてゆるべてゆるべ  
人ほゆるべてゆるべてゆるべてゆるべ

わらひ食とひ集あら朱羅引色妙の兒と  
智多<sup>知多</sup>の羅とひそもの爲の食と之を記す  
つちとてふらはせぬ事とひそもこれ  
織女<sup>織女</sup>奇<sup>奇</sup>の集云

七  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
あらひとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
七  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく

八  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく

九  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく  
ひそもとくわくとくわくとくわくとくわく

わのの義とては西と人の事とよ  
先づは御微雨とよあと今葉は  
かくとすとまこととまこととまことの  
事とよあとよあとよあとよあとよあと  
ひきれあとよあとよあとよあとよあと  
ひきれあとよあとよあとよあとよあと  
よあとよあとよあとよあとよあとよあと

九

十

是すとよあとよあとよあとよあとよあと  
よあとよあとよあとよあとよあとよあと  
よあとよあとよあとよあとよあとよあと  
よあとよあとよあとよあとよあとよあと  
よあとよあとよあとよあとよあとよあと  
よあとよあとよあとよあとよあとよあと

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

あまの御代りの事はおれもなにか  
竹の籠ひき日向をへて一ちば御さんのが  
もわらひとおの身の事はいふやうとも思  
とまう

士

さくらの御代りの事はおれもなにか  
竹の籠ひき日向をへて一ちば御さん  
すまの御代りの事はおれもなにか  
ととじとくよの事はおれもなにか  
ととじとくよの事はおれもなにか  
ととじとくよの事はおれもなにか  
ととじとくよの事はおれもなにか

人今とあらどのみと思ひやらぬうち  
神のじめどもとどこもおもに御船の川よ  
うやはく里洋／不よハ越れ表のをちうと  
くくくとまひやむのすすりゆきく  
事也

士

あまの御代りの事はおれもなにか  
さくらの御代りの事はおれもなにか

さきの天智天皇の御代りの事はおれもなにか  
て筑前国上座郡（さかのたに）あらとおとみの山  
およそうちの御代りの事はおれもなにか

と本れも爲めのと云ふ事は無き事にて  
用ひどりひなましの事も人をうながす事の  
とてての事もあらずと云ふ所の事なる  
なりと云ふ事もあらず

はるかの昔の事なりけりと  
まことに御子様の御名前を  
おもひてゐる所の事なりけりと  
そへくわづかさぬ事の事なりけりと  
おもひ新郎の御名前を記す日が記すも新郎と云ふ  
てするうひの事とよきの集云

正月廿二日  
晴

ト娘やへとくらうる  
ト娘の嫁めのわと云ふと云

いはくのうふと集云

おのれをひきのじとてかくのり

かくのじとてかくのり

又とてかくのじとてかくのり

同云とてかくのじとてかくのり

かくのじとてかくのじとてかくのり

ぬるや

若云とてかくのじとてかくのじとてかくのり

あうてわうといもとわう又わうといわう

ひきのじとてかくのじとてかくのじとてかくのり

とてかくのじとてかくのじとてかくのじとてかくのり

さうらわうといわうといわうといわうといわう

ひきのじとてかくのじとてかくのじとてかくのり

後拾遺詩云

そぞ見ゆる人の心をなき風とす

そぞ見ゆる人の心をなき風とす

五

あくぬのやううらうのあ一説ある

あくぬのやううらうのゆふ思ふ

あくぬのやううらうのゆふ思ふ

とほくぬのやううらうのゆふ思ふ

やまわらげりのまきもやまうつとまくうらうじと  
ひんじてやまとはまくまく御とうじんと  
ひまへやまへり

共 いのほるのひのれをかむ

くまゆめかずかずのほくまくのば

こまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
日暮とくまくまくまくまくまくまくまくまく  
竹ひよのうたのきとよあてよよりよより  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
物とよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

吉

ううううううのまよよよよよよよよよよよよ

うううう莊子文之無何有之鄉也もふに蘿  
姑射山也或物云共仙人住所也堯道帝位居  
姑射山之ゆへゆるのみとぞ射山とのりへ

大 ありて御のうけにかくまひま  
ものとくじりのよきよくじ  
ちゆまゆもひかくまほとくじくわく  
とくじくわく集よし振放とくじの月  
とくじくわくをくふ月人やとくじもく月  
人ゆもく月よく月よつまよの神ミハ天照  
太神ミタマの神ミタマと月神ミツタマ天照大神ミタマ日神ヒタマ  
の神ミタマ又月とひまとくまきは更  
あくへミタマ或物ミタマ云前皇后ミタマとくじくま一ミタマ萬  
千ミタマ門ひきのくまよひくまひくま  
ひくまひくまひくまひくまひくま  
わらのまきばうよりくすりや但ミタマひ  
ことひてもひくまの月と浦ミタマくまひくま  
月とくまよくまよくま

尤 けやれぬみてくれやくゆく  
とくじくまとくじくま人ミタマ郎  
の争或物ミタマの女郎花ミタマのとくじた  
まくもくくわくじ此集の因よし謗ミタマ侮ミタマ人ミタマ争と  
ゆのくまよくまのくまよくまとくじくま集云  
らくめぬれくわくじくわくじくわく

あらすじうみゆきくわく、まぬ

とよむけりのまことくわく

辛 あれうきのやうれどゆけもわいとやま

ゆふまのうちめとくわく

うきはれくまほに雄略天皇<sup>アシカミノミコト</sup>が御てひ  
しめしよも絶きぬとひくらるくる  
のちくまのぼりきはみとむすみのむ  
のと云白麻<sup>アラマ</sup>とくのくわくひうけのとく

七

うきはれくわくのとくのとく

うきのち野<sup>アシカ</sup>をくまと云字とくとく  
うりてとくとくへかのとくの筆とくはくちくの  
とき紙とかきのはくわくわくはく  
されとわざれくわくの病とくはくはくとく  
とてよじれことくとく

八

みくみくわくとくのう

あいまとくわくはくすきとくまく  
うきはく合大支遷佐<sup>アシカミ</sup>一くまのうつ霧若達<sup>アシカミ</sup>  
國の女れとくまくわくあくとくの麻とくまく  
むくらわくあくとくの集<sup>アシカミ</sup>

かくよきのあまくふうとくひうる  
はまくらえむねほそて、ぬすま

えきしわきのゆくま

世 やなれもよわらげ、海にあらうきと

ヨリモおもじらむよ、けりゆく  
或物もあらじとくともの處うよゆり  
しきらうよとくとゆきとくゆとまて  
ゆよやまくよとくよしへきをよきハ白鷺の  
けとくとくをやめきひのけひのく  
あまくしりとくわくとくじとくあつよーと

盐

ゆくよしるやくよくやしるや

あら辛ゆくよくよと或物もあまくい  
とくはよくよのきよくよのきよくよの  
ゆよがりてのうよひよのきよくよの  
あら辛くよとあまくよのきよくよの  
えの辛くよのきよのきよのきよのき  
りよひとよとくよとくよとくよとくよと  
えんまくよとくよとくよとくよとくよと

あらりとひまどおのうとあらり

ゆうとおれくまほ思ひよまく

よきとひまどおのうとあらりの女

よきとひまどおのうとあらりの女

おひつねにいと曾丹平云

おひつねにいと曾丹平云

アリテセヒトヨリ

アリテセヒトヨリ

アリテセヒトヨリ

アリテセヒトヨリ

アリテセヒトヨリ

裏書或書曰天平勝寶五年春二月於尼本  
院橘卿之東家裏御食大丈等時主人大臣

同古歌云

安佐母岸比紀能勢伎母利家多豆加弓  
由流浪等伎奈久安哉弊流伎義

即歌傳云

安佐母与比記其情奈何者  
式部卿石川卿說云安佐母与比記所以  
然之者古俗語併朝炊飯謂之阿流母与比  
紀新也

五

川きれひとあとあくあり  
うせとん蝉のあすかせみもも  
まよとがくを見えとつともに  
うとうのんせんせんとあく  
とくのあゆみのうきひんともあく  
きぬのとくとんとせんとくとくとく  
とくの集まし室蟬とうとく  
同云とてうせんせんとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく

トキモヤ

卷云やうとある或說とてよ打聲蟬と云  
半ある聲とてよ打聲蟬と云  
とてよ打聲とてよ打聲とてよ打聲と  
とてよ打聲とてよ打聲とてよ打聲と  
とてよ打聲とてよ打聲とてよ打聲と  
とてよ打聲とてよ打聲とてよ打聲と

おもへるにあらはれどもひしのいとすま

まきはせりとむかとよみの同集云

おもへるにあらはれどもひしのいとすま

まきはせりとむかとよみの同集云

おもへるにあらはれどもひしのいとすま

まきはせりとむかとよみの同集云

おもへるにあらはれどもひしのいとすま  
まきはせりとむかとよみの同集云

おもへるにあらはれどもひしのいとすま  
まきはせりとむかとよみの同集云

おもへるにあらはれどもひしのいとすま

日の久りけりをりよか

又云

あくまうの金きりけりわめのひの  
アケルとてひめゆ

あくまうの金きりけりとてひめゆ  
みくまうの金きりけりとてひめゆ

セセ

やうもじらむみれはがく

せれ御みはきわきわき

えきう神もひのふうり大己貴神ハ

のえの神のひとめよ。せひるす世  
や彦名神も高皇產靈尊のあくまうがす  
とのえきてよよのせひとめよ。下を  
うそあくひとめよのをよ。痛と  
うそとおはまあるものあくまうとひと  
鈴のまきりひとまきりひ御みはきわき  
百姓の恩賴とひとめよ。かくまうの  
えの大臣ちの神も大和國城上郡大二輪神  
えきう日か記よひとめよ。古今云  
うそとおはまあるものあくまうとひと

と云乎も之の御神れ帝とすん申ゆ  
からみよの少佐をもぬえどれともす  
もじとおれ帝もりつまきうらや或人云  
あらみの御神ハ社もびくて御の日(萬  
とひ)ておひづりめぐる事とす  
はまく開かれやうせぬむやとて墨のあ  
とを引ゆるくはくとて墨をがと白半  
はくとて墨をとて墨をとて墨をとて墨を  
ま優神乃ちひとたちのくはくととて墨  
物神也の神とすんゆめう御神をもう  
半古語拾遺はとくとくの語に御神くわく蔓  
ゑとわくとわくとわくとわくとわくとわく  
とててとてとてとてとてとてとてとてとて  
とふはくとくし産れとくよりてとくとく  
の鷦とすくとくとくとくと大日や豊秋津湖  
引取よ端よ山川海とすじ草や緑よじゆ  
日神月神とじ鱗すとじ三歳すとじ

是よりモソウヘ天石櫻樟舟のま  
あくもよもかうとて川次ニシテ鳥居と  
トマヨスル

同えみよれんひも竹押す年を

善云日か記より御共ヒリシムのま  
シヒトトモヒタニテ男ノツクニ男女をアキ  
ナリモ<sup>或</sup>シテ又爲夫婦ヒリシムのま

共

シモトハシモヒミモヒヤリシモ

トモシモヒヤリセヨタラシ

日中記云、みよれんひも竹押す年を  
神武天皇御の新軍也す時ノミヤシ

ヨリ河内朝みわやマニミシカシトシカヒ  
て、みの面内リヒトトモヒサセモシテ、

ナリ國ハナハシシテ、ミモリシテ、アリハリ

ノミヤシモヒヤリセヨタラシ又邊  
公老翁のシヒヤリセヨリ斯ニアキモヒヤ

シモトハシモヒミモヒヤリシモ

國ありとモヒヤリセヨリカニモヒヤリ

トカアアのひの御城ひくさんと河あれ  
あくねりすりながらへーみこをもううんと下りて  
まくらばのまのとくじきくわくとくはひきる  
てりんうとうり終て又みじきのひみと  
ゆくよーとくよのひのくのくまくくさふ  
のまくへか絶鷺鈴とくわめきもくくわくわ  
かとくきのりあく秋津州のくわのと  
くわわざくもくじくよとくよ虫れぐくへ天舞  
船よののくのくよハ河間國よ舞船物舞  
じてやうとくの年れ却るくにえます  
約やき風か紀竟宴よあくはくもくも  
とひくわくわくれくもくよくくと  
わくいよみくわく  
とゆり又日午紀云大己貴大神、とくとく  
けくむく紀云四つ國と云饒速日命の天舞  
船よののく大くよめくよくよくよくよく  
え圓とくくゆまくくもくすかくよくよくよ  
とくよくよくよく日のが圓とくくよくよく  
とくよくよくよくよくよくよくよくよくよ  
よのひ道前とあまのかれ

一かうとあらわの事あらわの事  
きよせやからひの事あらわの事あらわ  
ほほの川うきよの事あらわの事あらわ  
あり一かうとあらわの事あらわの事  
まきはくつまくはくのとくとく  
くらはくもひくらはくもひくらはくもひく  
くらはくもひくらはくもひくらはくもひく  
くらはくもひくらはくもひくらはくもひく  
くらはくもひくらはくもひくらはくもひく  
くらはくもひくらはくもひくらはくもひく  
てよみうぢ

先

さくさくのへりのへりのへりのへりのへり

船うきのうきのうきのうきのうきのうきのう  
あらはくとくとくとくとくとくとくとくとく  
十一个とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ありのうきのうきのうきのうきのうきのう  
しゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
のうきのうきのうきのうきのうきのうきのう

三

さくさくおれうきのうきのうきのうきのう

やくとく尾れかがえりのねれやくとくとく

ものかうだらばの集と云ふ形尾とがけり  
をくわへてつるのあらわのまづらの  
ゆうとくはなむけたるのと行きと、この  
まづらとくとくはなむけたるのとくすとく  
くのうとくとくとくとくとくとくとくとく  
くのうとくとくとくとくとくとくとくとく  
くのうとくとくとくとくとくとくとくとく  
くのうとくとくとくとくとくとくとくとく

接撰  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

逃

うへんとくよのうへん

或物よりせれ國の郡司の家よりうへん  
うへん鳥すがと乃ちうへんハトが  
やくうへんとくよのうへんとくよのうへん  
とくよのうへんとくよのうへんとくよのうへん  
よのうへんとくよのうへんとくよのうへん  
鳥とえとくよのうへんとくよのうへんとくよのうへん

ちの代中よりうら食歌の俳者たる所のア  
ウシヨウノトキモカモラモヤシテア

カモラモソトツニ集ムハズヒトカモリ  
世 神まひのよしよをもうほまの

ミタマウタシテアヒトスルヌ

ミキモ神社モカメトミクミキガラムトウ

キナヒトシヒラタモトモサシテミタマのモ  
アヒレ社モキモサモモモモモモモモモモ

神アヒレミタマハアヒレミタマ

又源氏のわすひのアヘアキミ

アモトモハシタレモアヒレアヒレアヒレ  
アモトモヒトミスルキヤモト  
キモトモヒタレアヒレアヒレアヒレ

世

アモトモヒタレアヒレアヒレアヒレ

アモトモヒタレアヒレアヒレアヒレ

アモトモヒタレアヒレアヒレアヒレアヒレ

アモトモヒタレアヒレアヒレアヒレアヒレ  
アモトモヒタレアヒレアヒレアヒレアヒレ

内蔵とめへんとおなづかひはくら  
おとことまどひてくわへとまくらをくら  
とくさひりうそがすみひわらあらをひ  
とくさくわくとくべせとむらのそは  
ひれきのじうがおもむくやうまがひる  
とくさくしゆくわくの國うゑのよし  
ひらくまわのまくらうる<sup>ゆ</sup>まがくよると  
をくらうかのまくらうくらうくらう  
てもうれふくらうとくらうとくらう  
のまくらうのまくらうとくらうとくらう  
まくらうとくらうとくらうとくらう  
とくらうとくらうとくらうとくらう  
とくらうとくらうとくらうとくらう

同云をひととくらうとくらうとくらう  
答云とくらうとくらうとくらうとくらう  
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう  
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう  
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう  
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう

とくらうとくらうとくらうとくらう

ちの人の手とくらうとくらうとくらう

附とよかの、それよりけろのう日中記す。ゆる  
仁賢天皇の御年よりの天皇ハ履中天皇の源市  
邊押羽皇子のとて足利皇子雄畧天皇より  
さきより見そ見まわひもとゆうよまくひゆ  
まくわやーのとれよばり星をもひらはよ雄  
略天皇の子の清寧天皇トモヒロミとの御時  
太子よりのとて皇胤リトモラトモとて  
て皇胤リトモラトモとて皇胤リトモラトモとて  
さて象子のひりと仁賢ハ太子よりの兄顯宗  
白雲リトモあらよ清寧トモヒロミとて太子兄  
顯宗より傳とゆくアリトモはまつと見れ  
のすゆともうひとてはるよ傳よつまく  
ゆくう事のひより見そそのうち仁賢ハ傳よ  
ゆくへの顯宗天皇久居邊幕とくと白雲の  
うきへとあるく惠とゆくセラト記す。ゆく  
世 うきへいちらふりゆのゆまくそ  
人よあきねわやのうきへ  
或物よ云えひとハやくよもよとてと一々もる  
けうちくみまのやくよかどものく女のよ  
えきもうけひく女へまくばとものくありとせ

の筆とおぼえ難くかふる三年となり  
て日とひともとひ千束よほのゆきへうす  
ちまづわとひもあひぬう紙をきてわらぬ  
女とそむぎのとひのふるみやうのから  
こきもよひととく

向云ひとひわめぬうとせんとむじや  
養云あへひはいはすと或院ひよまひのす  
よもひよ御とひのゆめよわよもひのす  
ひとひのとひのひとひのとひのとひの  
びきもよひのとひのとひのとひのとひの  
ひもひのとひのとひのとひのとひのとひのと  
ひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと  
ひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと  
ひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと

御用年云

すとひとひとひとひとひとひとひと

ひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと

ひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと  
ひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと  
ひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと

五五

けいのとひのとひのとひのとひのとひのと  
ひのとひのとひのとひのとひのとひのと

聖母神の御事より御まわらひと云ふレ 堤略參見居

一経多る御事御はせよ多きもの多きと云ふ  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
もて御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事

やうに御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

聖母神の御事御事御事御事御事御事御事御事

わひとりりとあるやあさん

寺事と和泉國の御神輿の御取  
事としての御心をもよおすがりと申す御神社  
の御神輿ハ御内の事と申すやうに申す御内  
と申すくらしへと申す御内わらひと申す  
御内はと申す御内わらひと申す御内  
の御内と申すやうに申す御内  
御内と申す御内と申す御内と申す御内  
と申す御内と申す御内と申す御内  
御内と申す御内と申す御内と申す御内  
と申す御内と申す御内と申す御内  
と申す御内と申す御内と申す御内  
と申す御内と申す御内と申す御内

おやふくよみうらむゆめとけくわく  
尾のひつまどりとくわくもせうだむち  
あはれかさんとくともう一申にす  
あはれはせんがくのよのう申にす  
てとひとくのとくとくの儀のうり  
がくはまくのわがくの蜜とくとく  
ねくとくあとくとくとくとくとくとく  
わの蜜のうはがくとくとくとくとくとく  
てとくとくとくとくとくとくとくとく  
わの蜜のうはがくとくとくとくとくとく

うすもくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

共

想やむとくとくとくとくとくとくとく

ゆふあひのとくとくとくとくとくとく  
は年とくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

みどり中綴とて御身はひるを寄へとかまひ  
毛蓬川を越へてもとめの車にまといとつと  
まくらに毛蓬川をかきのりとすまへとつと  
書ふとくらまきがわのわまの河よむとまと  
ゆきのものとくらへとくらへばりけのて橋  
とくらのあまへとくらへとくらのりとくら  
さくらのあまへとくらへとくらへとくらへ  
橋連浪佐木とほくまの又忠孝寺云  
木連浪佐木とほくまの又忠孝寺云

又曾丹年子也

此年の論義ハラモトアヤシマリモ之

以下六首ハ経勢物語年々

究 リツツルモクルモトモアリ

トヘアハシヒムニシトモアリ

ハキシタタカシマリカセテリト  
サムシタタカシマリカセテリト  
シモシタタカシマリカセテリト  
のミシタタカシマリカセテリト  
アキタタカシマリカセテリト  
ウカモタタカシマリカセテリト

御如相盡魔滅とソヌ支わリ佛の滅  
ソソヘシキモセシ人のももシモヒ  
のミシカシモシモヒトカシモヒ  
ソハシトカシモヒトカシモヒ  
カシモヒトカシモヒトカシモヒ

四 山のあれハソクスムナリハ

モノリタモトシムトアシム

ソヨウ山林行財都北モセシモヒ  
モヒモヒモヒモヒモヒモヒモヒモヒ  
モヒモヒモヒモヒモヒモヒモヒモヒ

謙の御前行方不明とめ  
あひきもたる興味あるからあらうがの  
佛の涅槃の時ハ日月星宿も度とすとし鳥  
獸のうさ本草山川水や山川まで飛びて  
しゃくのアシカと飛ばはるのだけ物  
の出でとくびとれ日月星宿も度とす  
とのそしハ志の高きとくにあらうとある  
涅槃ハ三月廿九日午後八時半をて終る  
並一  
モロコシのまゝ死んでゐるだけの

モロコシのまゝ死んでゐるだけの  
アシカとくにあらうとある  
トヤマヒラタニヌツのとくにあらうとある  
モロコシのまゝ死んでゐるだけの  
とくにあらうとある

型  
モロコシのまゝ死んでゐるだけの  
アシカとくにあらうとある  
モロコシのまゝ死んでゐるだけの  
アシカとくにあらうとある  
モロコシのまゝ死んでゐるだけの

モトハシカニシマセスヒコトハタケル九十九  
トシカニトモテ物縁スルニシの事ノカツル  
ヒトヒトシナガテシハタケル九十九ミ  
アリシキハタケルナリヒトソラシニカサシタ  
日シセシムシハタケルナリシタマトヨツシ  
波シカセドモアリヒタケルナリシマス  
シテアリシトモアリヒタケルナリシマス  
はナガタ神ナシメルアリハタケルナリシマ  
ヌチナリシテアリヒタケル云

アタマハタケルナリシマス  
アタマハタケルナリシマス

アシカニシマテ神之ナシリカシテ  
シカシナガシナカホリカホリカホリカホリ

聖 やまと鳥乃御モタカシタヨリ  
キナシシテアリシマス

井もとハ若葉より井堤シタ紀伊の川原モ踏  
ミルナリヒトソク位の辛乃シカシタヨリ  
ヒトソクアリナリアシタヨリモ井頭丸也モ

うそを犯すのなら何よりわざとらうの心  
とまよしの心の心をとあるやうに  
まよふといふのとまよふのとまよふのとま  
せうせうといふのじふとせうせうとまよ  
番四 みよのをのじふとひきかうす

そはかくいふとまよふとまよふとま  
えいみゆくとまよふとまよふとまよ  
番五 おしゃの圓みうのとまよふとま  
りやのじと田のとまよふとまよふとま  
ゆうじの家ものとまよふとまよふとま

同文或人の釋よりのじれりとへ東國なり  
るるものなりとへじひとと發起へる人よ  
その見廻とへじひとと發起へる人よ  
けらむとへる

番六 今書くとへる人よ  
あやまつてゐる人よ  
ゆうてあへのとまよふとまよふと  
とまよふとまよふとまよふとまよふとま

とわきハ鶴代義とくらむかにとす惜すも鷦  
のこり筆く約めを済に相ひ年云

申年無之不當之故か同私云未得其年  
不誤次第相之

翌 カクシテハツナアニミトカツシ

ミヒセキナリム内シテシテ  
是ち日中紀竟宴のす。往復諸儀敷冊等  
華の姫子の年也三年とてひうのやうにて  
ゆきしむるよりへり。シテシテシテハカミハタマシテ  
モカヘラノヘニ年よかを笑ひとまつて  
喜ひゆとお年云。

カミシウハアリキとスジはもあレシ  
モアリハ人アリキニシテシテ

とトアリのまやアリシテシテシテシテ  
モアリトシテシテシテシテシテシテシテ  
モアリハアリシテシテシテシテシテシテ  
但サヤドモアリシテシテシテシテシテシテ  
ササヘタタキシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
トアリハアリシテシテシテシテシテシテ  
ヨミシテシテシテシテシテシテシテシテ

用ひるをうらやまうれしのううじのとくが  
るゆやうれしゆうゆうゆうゆうゆうゆう  
長秋よそつうよそつうよそつうよそつ  
てをわくへとええとえとえと母とくと  
らめとくとくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくと  
えとくとくとくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくと

世事よそよそよそよそよそよそよそよ  
よそよそよそよそよそよそよそよそよ

尾も同竟宴の年も敏達天皇の内も蘿の  
表と鳥の歌よそよそよそよそよそよ  
痕余と云人がどのよそよそよそよそよ  
よそよそよそよそよそよそよそよそよ

長能年云

聖

うううのちねやまうとくにいた  
うれはきあらやばうとく

かをとて修行者とゆふことを靜圓僧  
正ハ申けられんハ小式部内侍の子也

曾丹舟云

聖  
以テアハシカヒタ紀物と云ふが  
云ふものあるとしもツハリ  
云ふれ御心と云はばまん乃恩徳と報恩と  
年々の事と云ふとより下人ハ云々有  
里と云うと云義と云荷前もと云書とも  
黃帝昇天云々あると云う頼と云  
より日記云々恩頼と云ふ

赤深平云

凡ハ身も又しまれひとをやまひと  
ひりのわゆらはゆきりん  
是ハ法文よりあらず也羊としもくとえ  
せのひきと云ふと云ふと云ふと云ふと  
云ひきのりと云ふと云ふと云ふと  
のうはとせやれりと云ふと云ふと  
世中のりと云ふと云ふと云ふと云ふと  
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

すまへる白駒ハ日暮景物ハ月也 日日  
えこれりよのやうにせんりも夕見とて又月  
の移とてかくわのとてあらのとてハ樓炭煙文之世事  
のとてよ虎よとてよとてよとてよとてよとて  
よとてよとてよとてよとてよとてよとてよとて  
あらよとてよとてよとてよとてよとてよとて  
よとてよとてよとてよとてよとてよとてよとて  
わひよとてよとてよとてよとてよとてよとて  
ミカツリシキよとてよとてよとてよとてよとて  
鬼わよれはよとてよとてよとてよとてよとて  
はよとてよとてよとてよとてよとてよとて  
ねとてよとてよとてよとてよとてよとて  
とれよとてよとてよとてよとてよとて  
トアリとてよとてよとてよとてよとて  
をよしよとてよとてよとてよとて  
よとてよとてよとてよとてよとて

け辛ち古チ也

年のれよとてよとてよとてよとて  
月の移とてよとてよとてよとて

遊友人寄云

九

めくらのまわるのあうるへ

ゆきのちよへゆるわられ

とせはすいゆのと云虫のうと合葉へそひも

よほくさくやとへゆきへみちうどく

とせがくちのをくしのゆくましゆの他

えやまのれとへ云贊ゲンゼンと云文とくもと

とせはすいゆのと云釋へとせとやくもの

とせとものひくとや又それがくとも

とせやとれとくとくと云半のわきへかく

あくとくやくせとへとせとくとくとく

とせとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とせとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とせとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とせとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とせとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とせとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とせとくとくとくとくとくとくとくとくとく

又まくねうへとまゆをとひを人ゆめよも

まゆもまゆの

追勸守宮糞  
玄盤云以血塗辟女有私情  
洗之不落又抱朴子云ゆりの日百日之内  
とタリセラムのちとはけつせんとせき  
かすいおちととせりき事の後ハ古事記  
よりの若玄盤の失敬義もくゆひま  
がり私情わざ不落とあるハ和漢書  
ゆりへきよとまとて年月をうへるじ  
くもちはけりとゆわらととみけ

わゆをりへてやわらへととみけ

奥義抄中終



